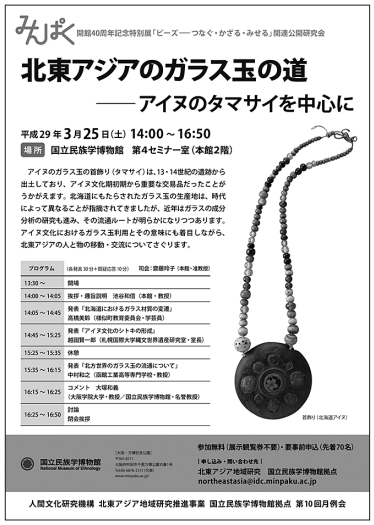
研究成果の公開──最近開催されたシンポジウム等から


みんぱく 開館40周年記念特別展「ビーズ──つなぐ・かざる・みせる」関連公開研究会

北東アジアのガラス玉の道
──アイヌのタマサイを中心に

平成29年3月25日(土) 14:00～16:50
場所 国立民族学博物館 第4セミナー室(本館2階)

アイヌのガラス玉の首飾り(タマサイ)は、13・14世紀の遺跡から出土しており、アイヌ文化期初期から重要な交易品だったことがうかがえます。北海道にもたらされたガラス玉の生産地は、時代によって異なることが指摘されてきましたが、近年はガラスの成分分析の研究も進み、その流通ルートが明らかになりつつあります。アイヌ文化におけるガラス玉利用とその意味にも着目しながら、北東アジアの人と物の移動・交流についてさぐります。

プログラム	(各発表30分+質疑応答10分) 司会:齋藤玲子(本館・准教授)
13:30～	開場
14:00～14:05	挨拶・趣旨説明 池谷和信(本館・教授)
14:05～14:45	発表「北海道におけるガラス材質の変遷」 高橋美鈴(埋蔵文化財調査委員会・学芸員)
14:45～15:25	発表「アイヌ文化のシトキの形成」 越田賢一郎(札幌国際大学/縄文世界遺産研究室・室長)
15:25～15:35	休憩
15:35～16:15	発表「北方世界のガラス玉の流通について」 中村和之(函館工業高等専門学校・教授)
16:15～16:25	コメント 大塚和義(大阪学院大学・教授/国立民族学博物館・名誉教授)
16:25～16:50	討論 閉会挨拶

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology
〒565-8511 大阪府吹田市千里山西3丁目1番地 Tel:06(6876)2151(代表) www.minpaku.ac.jp
参加無料(展示観覧券不要)・要事前申込(先着70名)
「申し込み・問い合わせ先」 北東アジア地域研究 国立民族学博物館拠点 northeastasia@idc.minpaku.ac.jp
人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館拠点 第10回月例会

北東アジアのガラス玉の道──アイヌのタマサイを中心に

日時：2017年3月25日（土）
場所：国立民族学博物館
主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト 北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点
企画：池谷和信

わが国における先住民アイヌ（Ainu）の人々によると、ガラス製の首飾り（タマサイ。シトキと呼ばれる金属板がつくこともある）は、13世紀から14世紀にかけての北海道内の考古遺跡から出土しており、「アイヌ文化期」の初期から重要な交易品だったことがうかがえる。また、個々の玉ではブルーの色が多く、それらの直径は3cm以上と世界的にみても大きく、経済的価値が高い。アイヌの女性は、クマ祭りなどの儀礼の際にタマサイを身につけていた。当時、これらはアムール川流域からサハリンを経由して北海道にもたらされたとされるが、ガラス玉の生産地は、時代によって異なることが指摘されてきた。さらに近年では、ガラスの成分分析の研究も進み、その流通ルートが明らかになりつつある。本公開研究会では、「北海道におけるガラス材質の変遷」「アイヌ文化のシトキの形成」「北方世界のガラス玉の流通について」という3つの発表を通して、アイヌ文化におけるガラス玉利用の実際とその社会経済的な意味を考えることがねらいである。これらをとおして、北東アジアの人々やものの移動や交流の実際について探ることができた。

国際シンポジウム

La Culture Populaire au Moyen-Orient: Approches Franco-Japonaises Croisées

日時：2017年3月27日(月)～28日(火)
場所：フランス社会科学高等研究院(EHESS)、パリ
主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト 現代中東地域研究国立民族学博物館拠点、EHESS、Institut d'études de l'Islam et des sociétés du monde musulman（IISMM）
企画：西尾哲夫、齋藤剛（神戸大学）、フランソワ・ブイヨン（EHESS）

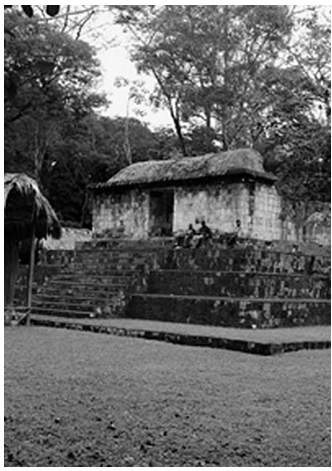
現代中東地域研究民博拠点は、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業・現代中東地域研究の中心拠点として他の4大学拠点とともに大型国際共同研究を推進している。

今回、民博共同研究「個－世界論──中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」(代表・齋藤剛)と連携して、個が世界を紡ぎあげていく公共的コミュニケーション空間がグローバル化によって変容する中で、個の有する他者観が社会的心性としての世界観との間でどのような相互作用と相互変容を迎えてきたのかをテーマに、人間文化研究機構が学術協定を締結しているフランス社会科学高等研究院との共同事業として国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは現代中東の民衆文化に焦点をあて、既存の「民衆」概念では等閑に付されてきた「民衆文化」の編成とその資源としての活用という新たな現象の生起と、それに伴う人々のアイデンティティー、社会関係の再編が中東世界において新たな文化の再編／創造をもたらしている状況について、フランス側からは社会史的な視点、日本側からは民族誌的な視点から議論をおこなった。

公開講演会

メソアメリカとアンデスの古代文明と現在

日時：2017年7月1日（土）
場所：国立民族学博物館
主催：科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫［茨城大学］）、同研究A04班「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（研究代表者：鈴木紀）
共催：国立民族学博物館



科研費・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（2014年度～2018年度）の中間的な研究成果を公開するため、研究を構成する4班の若手研究者が講演を行った。

メソアメリカ考古学分野では、福原弘識（埼玉大学）が、メキシコ中央高原の古代都市テオティワカンの国家形成過程を、住居址の変化から跡付けた。アンデス考古学分野では、江田真毅（北海道大学）がペルー南部のナスカ台地に描かれた鳥類の地上絵を鳥類形態学の視点から分類し、近隣の神殿遺跡から出土した鳥類の骨や羽毛との異同を考察した。

環境史分野では、大森貴之（東京大学）が、ワランゴ樹を手がかりに、年輪年代測定や放射性炭素年代測定等の手法によってアンデス地方の古環境を復元する方法を紹介した。文化人類学分野では、八木百合子（国立民族学博物館）が、ペルーの古都クスコのキリスト教聖人像用の衣装を製作する刺繍職人たちの間で、インカの太陽等の歴史的モチーフのデザインが選ばれる理由を考察した。

講演後、質疑応答が行われ、テオティワカンの人口増加を促した要因はなにか、ナスカの鳥の地上絵に足が描かれていることの意味はなにか等、講演内容をさらに深める議論が展開した。